"poevel" 短編小説 Fae Trap

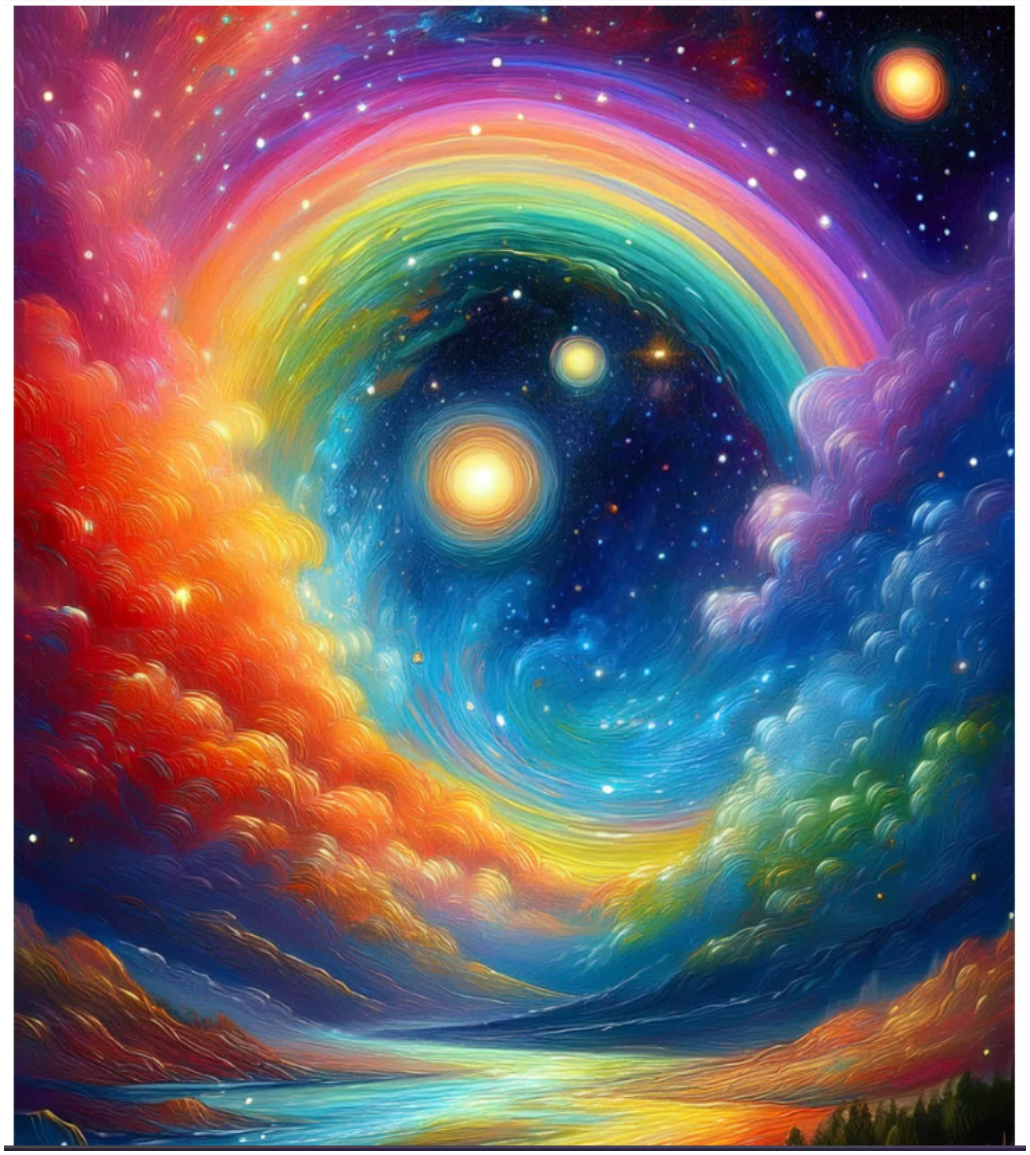
たった一人だけの貴方に～ Cheer を

飛鳥世一　作

目次

はじめに 1
“poevel” 短編小説 FaeTrap 4
謝辞とあとがきと解説 13

はじめに



スクリーンショット ２０２５-01-10 ０７０６４５.png

素敵なグラフィックでしょう？
神秘的な世界を繋ぐ虹。
夜なのでしょうか。
夜明けなのでしょうか。

「闇夜の虹を夢に見て」

これは私の書くものが
たったお一人でも良いので
読まれる、あなたにとって
虹のような存在になってくれれば……
そういう思いを込めて書いた一行詩です。

グラフィックは私の大切で
大好きなクリエーターさんが描かれたものを
お願いして使わせて頂けることになりました。
私にとりましては本当に大切なクリエーターさんのお一人です。
どうか大切に温めて頂きますようお願い申し上げます。

ここに紡いだ詩小説「poevel」が様々な思いを抱えながら
一生懸命生きておられる貴方の星月になることを願っています。

闇夜の虹も身を置く場所が変わったなら
不可能なことではないかもしれません。

『闇夜照らす星月たらんと欲す吾言葉もち大丈夫と』
「闇夜の虹を夢に見て」

お楽しみいただければ幸いです。

ちなみにですが……妖精の罠にはたくさん良いことも隠されているのだとか。

令和九年一月吉日

筆名 飛鳥世一 (辻話人〔フール〕)

“poevel” 短編小説 FaeTrap

ぼくは飆 (かぜ)
きみは雲
ぼくが得意なことは匂いを運ぶこと
揺ら揺らはこぶ
浮わ浮わはこぶ
ひゅーひゅービュンビュン運ぶんだ
匂いを運ぶだけじゃないんだよ
お手伝いだってできるのさ
季節を連れてくるでしょう
美味しい種も連れてくるでしょう
悪い流行り病は吹き飛ばす
でもね時々失敗もするのさ
火事で困っているひと手伝うと
劫劫劫 (ごうごうごう) って火事大きくなるから
悲しくなる

でもねでもね
一番ぼくの悲しいことは
きみを摑まえられないことなんだ
ぼくが急いできみに追いつこうとするでしょう
するとね
きみはきえっちゃうのさ
棚引くシッポを漂わせて

少年は詩を剞きざむことが得意でした
中でも、風の詩を剞むことを好んでいたようです
丘に展りては丘吹く風を詩い
山に登りては谷わたり吹き上げる風を詩い
海ながめては波乗りみたいに波頭けずる風を観察しては詩を編んでいました

編んだ詩は少年の大切なノートに書き認 (したため) られてゆきました
夏が終わるころには「夏の風たちのお話」で少年のノートはびっしりです
秋が終わるころにはノートも終わりそうでした

少年は一人でいることが次第に多くなりました
野球も、サッカーもスキでした
でも野球やサッカーを好きな友達の中には詩が好きな友達はいませんでした
それどころかサッカーをしながら “うける風” を詩に編んだとき
少年は友達からある言葉を投げかけられたのです

「…… お前、何書いているんだよ……なんだよそれ、みせてみろ。ゲッ、なんだこれ、おーい皆ぁ〜こいつオカマ野郎だったんだぁ！」
友達は少年のノートを取り上げると飛び跳ねながらノートを天高くかざしました
風が音をたててノートを捲りました

【やめろ ！ 風が怒るから ！ 飆の呪文は強いんだ ！ おまえなんかイチコロさ】
少年は心の中で呟きます

周りの友達も「見せて見ろ、みせてみろ」と囃立てました
すると先生がその友達からノートを取り上げます
「雄太、体育の授業中にこんなもの書いていたのか ？ ちゃんとみんなのプレーをみて応援しなきゃダメだろう。だからお前は……」
そこまで云った先生の眼は
巻き上げる焔が熾 (ほのおがおこ) す恐ろしい熱風を想わせました
「こんなところにも ？ こんなところにも飆がいた。先生の中に風がいる」
少年は何も言えずに先生が手にしたノートを見つめていました

さあ
体育の授業が終わって昼休み
教室の中は大騒ぎ
「オカマぁ〜オカマぁ〜オカマ野郎」
「男のくせに “し” なんか書いて気持ちわりぃ」
少年は
体育の授業のおわりしな
先生から返されたノートに向かい

一生懸命サッカーに感じた風の詩を綴っていました

腹が立ちました
自分のお腹のなか出口をもとめて巻き上がる竜巻を感じていたのです
【駄目だ。。。レベル４だ。そうだ名前をつけてやろう……ぼくの竜巻だからね。ユータイスター…チョットちがう。ユーツイスター。うん。ユーツイスターにしよう。これでまた詩ができるぞ】

少年は
聞かぬふりをしながら我慢をしなくて済むように
自分の興味のあることに考えをむけました

知ってるかい
ぼくのお腹の中には竜巻の子供が棲んでいる
ふだんは寝ているのさ
ときどきご飯を食べに起きてくる
ぼくが満腹でもお構いなしさ
食べたくって食べてるんじゃないんだ
いつだってぼくの周りが食べさせる
食べたくなくても食べさせる
竜巻の子供はだんだんおおきくなるのさ

食べ過ぎるとね
最初は吐きたくなってくる
おかしいね
食べていないのに
おかしいね
悪いものも食べていない
吐いたらさスッキリすると思ってた
でもね
それが合図なんだ
ぼくの竜巻が爆発するさ

少年は
ノートの余白に書き殴りました

普段は丁寧に書くのですが今日は丁寧には書けません
でもね少年は
自分にしか読むことのできない書き文字を身に付けていたのです
先生からノートを返してもらうときに云われた一言がありました

「雄太、お前のノートどうして読めるものと読めないものがあるんだ？ 丁寧に書いているのは読めるけど、時々、字が汚くて読めないものがある。まるで蚯蚓がはっているようだ。もっと字の練習をしなきゃ恥ずかしいぞ」と。

エッチな本も好きだった少年は
自分の気に入った言葉や知らない言葉を調べると
ノートに書き記してもいました
とうさんや母さんに見つかったらヤバいから
「何か方法を考えなきゃ」
少年は暗号を作りました

数字の数え方は何ページ目の何行目を言葉を繋ぎ暗号にしました
文章はわざとに崩して書きました
繋げて崩して簡略化させて
「おかあさんのこうぶつ、おかあさんのこうぶつ、おかあ」23 頁
「おとうさんのこうぶつ、おとうさんのこ」17 行目……と
これで誰に見られても平気だと考えていたようです

学校からの帰り道
あたりには晩秋の風が西日をともない吹いていました
つめたい風でした
少年の首もとめがけて入り込もうとする風
少年は手を前に組み合わせ
フーフーと温かな風を送ります

帰り道に通る公園
色とりどりの花たちが首 (こうべ) を揺らしていました

『これも風の得意なこと　花は風に揺れるから　きっと綺麗なんだ　そうさ揺れなけりゃ死んだみたいじゃん　動かないんだから　死んだものは書けないよ　死にそうなものだって書けやしない　だってぼくは生きてるし　風も花も生きている　おかあさんが買ってきた造花　ぜんぜん綺麗じゃない　ドライフラワーだって意味わからない　死んだお花の何が好き？　扇風機の風に驚いて　吹き飛ぶ枯れ花の何が好き』

少年はまるで歌を謳うように言葉を紡ぎました

すると少年の眼に飛び込んだ景色の前
少年のちいさな足が止まります

「なんという花だろう。すごく細い花弁が小刻みに風に震えてる」

少年は公園の道端で座り込んで花を観察しはじめました
花弁はプルプルと震えていました
細い茎の上
みんなが一斉に首を揺らします
右へ左へ前へ後ろへ
一糸乱れぬダンスを想わせました

スクリーンショット ２０２４-12-27 １５５１１５.png

一匹の熊蜂が名も知らぬ花の上を行ったり来たりしています
熊蜂の胴体が黄色いためでしょう
黄色い花の上では姿が見えなくなります
風が強いためでしょう
首を揺らした瞬間に花から急に飛び出します

「あぃ〜いいね。そこの花ならよく見えるよ。熊蜂くん。そこの花の方が君にはお似合いさ」

少年は
独り言を呟くと大切なノートを鞄から取り出しました
強い風がバラバラと音を立ててページを捲ります

余白のページを開くと
手で抑えながら花たちを見詰めます
少年は
一つのことに気がつきました

『黄色い花……　』
『黄色い花畑　たったイチ輪赫い花　みんな揃って首 (こうべ) を刻む　風はみんなを一緒に揺らす　なのになのに　どうして君は赫いのだろう　なのにどうしてヒトリなの　君は赫くて平気かい　ぼくなら竜巻育っちゃう　ぼくならきっと吐いちゃうよ　でもね　熊蜂くんは君が好きみたい　君の頭の周りを飛んでいる　まるで妖精が飛び交うように』

少年は
丁寧な字で詩を紡ぎました
大切なノートに
詩が出来上がり
立ち上がろうとしたときです
なにを思ったのでしょう少年はもう一度座り直すと
慌てたようにペンを走らせました

赤い花よ
わたしはきみが好きだ
わたしを美しく見せてくれる
きみが好きだ
みんなが一緒に首を揺らす
それでもきみを見失うことは無い
たったイチ輪赤いから

知ってるかい
妖精の罠というお話しを
きみはどちらに眼がゆくだろう
たったイチ輪の赤い花
大勢の黄色い花たち
どちらが妖精の罠なのだろう
次元の狭間に飛ばされるのは
どちらの花に触れたらだろう

わたしは赤い花に触れてるよ
…… 飛ばされずに

少年はノートに書き記すと
静かに立ちあがり
低くなった西日に向けて歩きはじめました

風は口笛を吹いているようでした
ヒュリー　ヒュウ－ヒュウ　と

了

タイトル「小説 Fae Trap」
飛鳥 世一 作

２０２４年 12 月 30 日
２０２４年最終作品

少年の家出.jpg

謝辞とあとがきと解説

謝辞

ここでの写真の使用をはじめ、note での使用を快く許可頂けましたクリエーターであり作家、詩人である悠冴紀様に、この場をかりまして厚く御礼申し上げます。有り難うございます。

また「はじめに」でご紹介申し上げたグラフィックのアーティストである「ねこ」様にも、心から感謝御礼申し上げます。有り難うございました。

皆様よりの温かいお心遣いを頂戴し、こうして纏めることができました。

有り難いことです。

スクリーンショット ２０２４-12-27 １５５１４６.png

あとがき

　詩のようなもので小説のようなものを、ずっと書きたいと思っていました。偶然目にした悠冴紀さんの写真。作品として纏めるまでに時間はかかりませんでした。この前に、同じ写真を使い、詩編だけの作品を一本あげているのですが。
その詩編を編んでいるときに、この作品の設計図のようなものが出来上がりました。
「童話のようなものにしたい」薄ぼんやりとしたイメージ。
ただ、有り得ないものにはしたくなかった。
「みんな仲良くチャンチャン♬」
たぶん…… そんな話はわたしには書けない。
それは違う人達にお任せしなければならないでしょう。

寧ろ、自分にフォーカスし、自分を知り、自分の可能性を探す旅こそが現実的ではないだろうか。

残念なことに……今の時代、様々な精神疾患がアルファベット三文字、四文字で顕される時代になっています。それを自分に当て嵌めて楽になる人たちもおられるでしょう。支える家族にしてもそうでしょう。でもね一方で、正解を求める事柄ではないようにも思えて仕方がないのです。
なにかの色分けの中に仕分けをするというのは、ガバナンスサイドのエゴかもしれないという疑問が持ち上がるのです。
　一つだけ言える確かなことは「大丈夫」ということ。なにも気にすることは無い。大丈夫。みんな生きなければならないのですから (笑)

俺流解説編
ショートショート『小説 Fae Trap 』

　いつも書かせてもらうことですが、解説を書くのは調子に乗って書いているわけではないので悪しからず。むしろ、自分のために書いているという目的の方が強いのかな。興味がある人だけが読んでくれれば十分です。
　少なくとも、自分が何をどの様に書いたのかはしっかり知っておくことも必要でしょう。まだまだ、評価を受けられるような身からは程遠いのですから。ちゃんと意志だけは機能させておきたいですね。

『小説 Fae Trap 』の面白味は、詩小説であるということでしょう。
わたしはこれを「ポエベル・Poevel」と呼ぶことにした (笑)
※英語ではポエムノベルというジャンルがありますね。

　どうでしょう。おかしな雰囲気を感じて頂くことできたでしょうか。
有り難い、有り難い、読み手さんから頂いた一つのコメントに〜
『あかい花と少年が重なっていくようで、文章も風のようでおもしろかったです！』と頂いたのですが、この「おもしろかったです」というのは、この作品に対する最上級の誉め言葉を頂戴したと感じています。感じ方は、感じ手が都合よく感じるに限るのであ

りますが。

むしろ、“おもしろかった” としか表現のしようが無かったのかもしれません。何故なら、それが「おかしな雰囲気」に繋がってゆくからなのですが。

これは、普通の小説では出来ないことを可能としてくれたという「面白味」の存在がありますね。それが「人称」に顕れます。
　通常の小説の場合、地文は一人称、三人称が常套となるでしょう。ここでは三人称としていますね。俗にいう神語りでもあります。

　しかし、そこに詩が入り込むことによって、話しを空中浮遊させることが可能になるようです。後半途中まで、三人称の地文と一人称の詩編が紡がれてゆくことは分って頂けるでしょう。
ところが、土壇場でその前提が崩れます。
所謂、わたし流にいう処の、足元をぐらつかせるという狙いへの導入。

例えばと云うことで眺めて欲しいのですが。

この小説のエンディング手前が最も我が魂を散りばめた場面となるのですが……この詩の登場によって、作品自体が朧にくるまれたようになります。

「えっ ？ なに ？ どうした ？ 何か変だ ！ 何処に戻ってもう一度読めばよい？」となることを狙っているのです。

赤い花よ
わたしはきみが好きだ
わたしを美しく見せてくれる
きみが好きだ
みんなが一緒に首を揺らす
それでもきみを見失うことは無い
たった一輪赤いから

知ってるかい
妖精の罠というお話しを
きみはどちらに眼がゆくだろう
一輪の赤い花
大勢の黄色い花たち
どちらが妖精の罠なのだろう
次元の狭間に飛ばされるのは
どちらの花に触れたらだろう

わたしは赤い花に触れてるよ
…… 飛ばされずに

この自由詩においての語り手は、ご理解いただけるように「熊蜂」です。そして、熊蜂の語りが向く先は二人いるのです。
前段は、赤い花
後段は、少年ですね

即ち、少年は熊蜂の視点をかり、赤い花と書き手の少年自身に向けて語り掛けているわけです。
これを効かせるために、この詩の前段に、同じ花を詩編に編んだ詩が必要だったのです。

わたしが一般的な小説というものに持つ感覚からするのであれば、合理性をもたせることは極めて難しいと感じるのですが、「詩」という存在がこれをすることに合理性を担保し得ていると感じられるのです。
　しかし、どうなのでしょうか。これを小説として可能とする方法は本当に無いのでしょうか。
　多分あるのかもしれません。そう云うテクニックはあるでしょう。
　きっとわたしが出来ないだけ、書けないだけなのでしょう。

が、わたしのレベルで考えついたことを書かせて頂くなら劇詩」が思い出されるのです。劇詩 (韻文詩・韻文劇) なら確実にやれでしょう。劇中劇の理論を持ち込めばやれるはず

なのです。

(笑) 文学を学んでいないものの悲しい奠。ここまでかなぁ。目一杯だね♬

ただ、今年わたしは韻文詩であり劇詩、詩劇を独学で勉強することができました。この作品の中に、その一端を少しだけ覗かせることができたと思っています。

(笑) タイトルの FaeTrap を最後の最後に文字通り、散りばめてみたのですがお楽しみいただけたでしょうか。

　熊蜂が妖精だったのかどうかは、読み手にお任せしたいところです♬
ここでは主題とはならないでしょう。
　あくまでも書き手の欲。こんな思いで書きましたということに尽きるわけで、読んだ方が何を感じて頂けたかはお任せするしかないのです。

どうやら、沢山の方に読んで頂けたようで、本当に感謝しております。
有り難うございました。

了

"poevel" 短編小説 Fae Trap

著　　飛鳥世一(辻話人〔フール〕)

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社